

大地の入り口が鮮やかな林檎で彩られる季節となりました。秋の訪れを感じさせてくれる光景です。ただこの「つがる」という林檎は、早生種だけにすぐに収穫してしまうので、楽しませてくれる期間は短いものです。

先週末の台風は何とか農作物への被害が免れました。直撃していたら、林檎や黄金色に実りつつある稲も大被害にあうと予想されていましたが、しかし、他の地方の被害や損害に対しては、心を痛め、お見舞いを申し上げます。

春先に植えたお米も黄金色になりつつあり、いよいよ案山子（かかし）作りが始まります。ここ数年は、テーマとして絵本から題材を見つけてきています。過去「ねずみばあさん」「カラスのパンやさん」今年は「すてきな3人組」に挑戦します。刈り入れ後、大地に飾られるのが楽しみです。

夏休みがあけて、さすがに子ども達の成長はすごいもので、この落ち着きにはびっくりです。朝の会、わらべうた、お話などへの落ち着き、集中力、そして 穏やかな雰囲気、こんな心の平穏に大きな成長を感じます。まさに、これから迎える読書の秋、秋の夜長を楽しむにはぴったりの心意気になって来ています。これから迎える秋。こんな素敵な心で楽しみたいものです。



## 【登山】

今年は、我が家にある登山グッズが大活躍する年である。そして 公私共々登山を楽しんでいる。（まだ秋の紅葉登山を楽しむ予定であるので進行中）

世界一周中の長男は、ヒマラヤに続き、アフリカ大陸2位のケニヤ山に続き、8月28日に最高峰キリマンジャロ登頂に成功したと連絡が入った。この次は 南アメリカ最高峰に挑戦するらしい。思えば、小さい頃から仕事（野外教室キャンプ）で皆と一緒に登山をしたが、家族だけで、長男とだけで登山をした記憶はないし、ずっと野球をしてきたので、山への思いもそんなにはないはずだった。

1番の驚きは、長女である。自他共に認めるインドア 運動嫌いでまさに芸術系の娘。小さい頃から、外へ遊びに出掛けようと誘っても、「家にいるのが1番いい」と言って、ひたすら紙に絵を書いていたし、山は最高に嫌いだった娘である。それでも、親は懲りずに一緒にキャンプなどに出掛けていたが、それが、今年の春あたりからザックを背負い旅をするようになったと思ったら、突然山小屋へアルバイトに出掛けた。それも日本で1番の秘境にある小屋である。そして、9月1日に戻ってきた。もちろん 「最高に楽しかった」に続き 「9月中にお父さんと一緒に山に登りたい」と誘ってくれた。よって、まだまだ今年の登山は続きそうだ。そして、昨日、娘は 友達と、テント山道具を持って、1週間ほどキャンプに出掛けていった。

この娘の山小屋に、お盆過ぎに妻と訪れた。と言っても、山小屋に泊まるのではなく、テントを持って、この小屋付近に泊まるのがさすが青山家である。妻にとっても、6年前に体調を壊して以来の本格的な登山であり、しかも6時間は歩かなければならない秘境であり、慎重さと今後の体調を占う登山となった。しかも装備の重いテント持ち。しかし、娘を訪ねるという大きな目標があった。子ども抜き夫婦の登山だけに、景色や花を楽しみ、会話をしながらのゆったりした登山であり、いつの間にか自分たちの年齢と時の流れを感じた時間でもあった。そして、劇的に娘と美しい奥深いアルプスで再会。まさに、夢を見ているような気分であった。それは、先に述べたように、あのインドアの娘が、一人でここまで歩いて来て、ここで働いており、そして生き生きとしている情景に感激し、小さい頃からの思い出がわき出たからである。

思えば、娘の出産にはすごい思い出がある。今から21年前の8月13日。野外教室のキャンプで、小学校低学年の子ども達15名を25歳の若い女性スタッフと一緒に、日帰り火打山方面に出掛けた日である。目標は、高谷池の湿原地帯であったが、ここに着くとあまりにも美しい火打山頂を見て、子ども達は登りたいと言うし、私もその気になり、天候も良かったので、山頂を目指してしまった。見事登頂に成功したが、下山開始は2時間遅れた。そして、天候は夏だけに急変して、夕立と雷になり、登山道は川になった。日暮れにはまだ遠く、時間的にはまだ余裕があったが、夕立のせいで、一気に暗くなった。稜線ではなく、深い森の登山道であったが、周囲の樹木に雷が鳴り響き、5、6分先の樹木に落雷した。足早に川のような登山道を下山したが、うしろを振り向くと、後続組がない。先頭集団を待たせ、私は必死の思いで登山道を引き返し、後続組を探しに登った。見つけると、子ども達は泣き叫び、若いスタッフも怖さのあまりパニック状態になっていた。若かった私は、スタッフを2、3発は倒し、子ども達の命を預かっているのだから、命がけで2、3人抱きかかえても下山しろ と声をかけて、2人で子ども達を抱えて下山した。そして、バスの所まで戻り、全員ずぶぬれの子も達を無事にバスの中へ入れた。そして、運転席のドアをあげようとした時、私の3分前の樹木に落雷した。必死の思いでバスに乗り込み、妙高の笹ヶ峰を（キャンプ場のテントや物品をそのままにして）逃げるように去り、夜8時に、祖父母の家の2階（その頃、大地はまだなくて、祖父母宅の2階で営業していた）へ戻った。そして、悪夢がようやく去り、生きて帰った喜びに浸った夜半に、長女誕生の知らせを京都から聞いた。

この火打山の登山は、その後の私の登山人生のみならず子育ての大きな教訓となった。登山計画、引き返す勇気、感情の揺れ、安易な思いや同情など、甘くみてはいけない、自然の脅威を身にしみて体験したものであった。そして、大人の判断が全ての命を左右するし、感情に左右されない厳しい判断と冷静な感情、時には冷たい冷酷な判断も必要となることを知った。自然の中で暮らすこと、対座する時は、大人の先を見る判断、子どもの感情に溺れない、揺れ動かない厳しい判断や思いの大切さが結果的に、命を守ることを知った。そして、祈ることも。

こんな苦い体験があるだけに、娘の山小屋への来訪はこの上ないうれしさがあった。娘は、山小屋での勤務終了後、3日間ほど、雲ノ平を回ってきたらしい。雲ノ平は岳人の間では、日本最後の秘境であり、究極の憧れの地であり、どんな健脚家でも、最低2日間は歩き続けなければならない奥深い厳しい秘境である。娘が私よりも先に、そこを訪れた事は悔しい反面、何か因果を感じた。同時に、妻も無事に往復することができ、健康回復に自信を持ち、「これだったら、妙高も大丈夫かもしれない」と帰りの車中で言う程であった。こんなうれしさもあり、娘の山小屋は、今年の夏の青山家の大きな財産となった。

子ども達の成長発達、我が家の長男長女を見ても本当に不思議で未知なものである。小さい頃からの適性、性格などの判断は、やはり大人の一方的な思いこみや他者やマスメディアなどからの影響が大きいかもしれない。どう転ぶか、どう変容成長していくかわからないおもしろさがある。だが、したたかに、私たちは自分達の楽しさを、子ども達のその時々感情のなリクエストにあわせるのではなく、親本位で貫いてきた。それは子どもと共に（子どものためではなく）私たち家族の人生の楽しみだったからである。

今夏の年長児妙高登山。21年ぶりにちょっぴり、本気モードになった自分がいた。